

## アイマスクによる体験学習の効果 —臨床実習への応用—

中西 代志子・池田 敏子・徳永 順子

### The Effects of Experiential Learning by Using Eyemasks —Application to Clinical Practice—

Yoshiko NAKANISHI, Toshiko IKEDA, and Junko TOKUNAGA

We introduced the method of the experiential learning of eyesight-screening into the area of a sense organ practice in order to research on how it could influence the students' understanding of psychology of the patients suffering from eyesight trouble and the ways of their helping the patients.

As a result, we came to the conclusion that the introduction of the experiential learning by using eyemasks was quite effective in understanding patient psychology and in helping the patients psychologically. We could find out the remarkable effects in understanding the necessity of helping the patients as well as the ways to help the patients.

---

**Key Words:** アイマスク, 体験学習, 感覚器実習

---

#### 1. はじめに

看護教育において体験学習を導入し、教育効果を得た研究は数多くなされている。しかし、体験学習が臨床実習に及ぼす効果に関しては、いまだ十分研究がなされていない。

本学の感覚器実習では、感覚機能障害を持つ患者の気持ちを理解し、日常の自立と社会への適応ができるように援助する能力を養うことを目的としている。講義から得た知識を、目的に添って実践するには2週間の実習期間は短く、特に、障害を持った患者の立場に立った理解や、援助を考える上でより効果的な指導方法の必要性を感じさせられる。

そこで、今回、感覚器実習に視覚遮断の体験学習を導入し、視覚障害患者の理解と援助にどのような影響を及ぼすかについて調査し、その効果について検討したので報告する。

#### 2. 研究方法

対象は、本学3年生の内、眼科病棟にて感覚器実習を行った女子学生34名とした。研究期間は、平成3年4月より同年7月まで及び平成3年9月より同年12月までとし、実習期間に一致している。なお、1グループの実習期間は2週間としている。実施方法は、感覚器実習開始後1週間目に視覚遮断によって生じる不安・不自由の理解と必要とする援助項目について第1回目のアンケート調査を実施した。調査後市販のアイマスクを使用し、学生2人1組で交互に体験学習をした。体験項目は、視覚遮断状況下の実習場面で最も多いと考えられる誘導による移動を実施した。体験項目の詳細は、表1に示す。所要時間は、1人約30分であった。体験学習後1週間病棟にて実習の後、同様に第2回目のアンケート調査を実施した。アンケートは自由記述法とし、記述された内容は原文の意向を損ねないように要約し、表2に示すThoms J. Carrollのいう「20の喪失」に示されている6群に

表1. 体験学習内容

| 体験項目         | 内 容   |
|--------------|---|
| 1. 歩行        | 1) 校舎内を歩行<br>2) 階段の昇降<br>3) 構内を歩行<br>4) 坂道の歩行<br>5) エレベーターの使用 |
| 2. 車椅子       | 1) 校舎内で使用<br>2) 構内で使用<br>3) スピードを変化させる                        |
| 3. Bed からの移動 | 1) 安静臥床から Bed Side への移動                                       |
| 4. トイレの使用    | 1) スリッパを履きかえて使用   |

よって分類したり。そして、視覚遮断によって生じる不安・不自由の理解及び援助項目について、分類された内容を体験学習の前後で比較した。

### 3. 研究結果

視覚遮断によって生じる不安・不自由の理解では、体験学習前の記述件数は延べ163件、体験学習後の記述件数は延べ80件であった。これらを、J. Carroll の6群によって分類し<sup>1)</sup>体験学習前後で比較した結果を図1に示している。

I 群の心理的安定に関連する基本的な喪失に対して生じる不安・不自由の理解は、体験学習前は48件、体験学習後も47件でほぼ同数であったが、

体験学習後は他の群に比較し、全体の件数に占める割合が最も高かった。記述された内容では「暗やみの不安」「空間が狭いと感じた」「他の感覚器が鋭くなる」等が体験学習後新たに挙げられていた。

II群の基本的技術の喪失に対して生じる不安・不自由の理解では、体験学習前は77件、体験学習後には28件となり体験学習後著しく減少した。記述された内容では、体験学習前には「日常生活動作の困難」「公共機関の使用困難」が挙げられていたが、体験学習後にはこれらは見られず、移動能力に関する項目が多く挙げられていた。

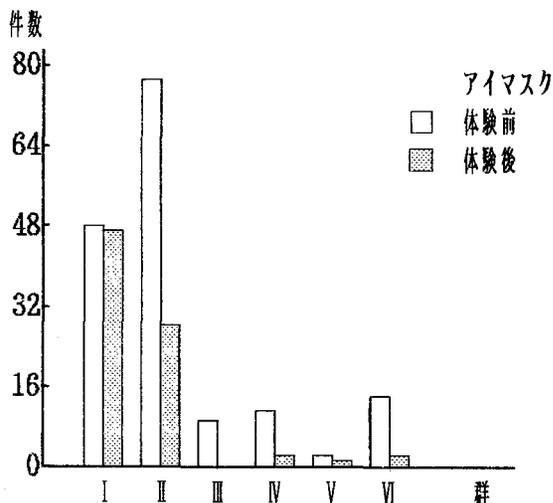


図1 体験前後の不安・不自由の理解の比較

表2. 20の喪失

|                    |                       |
|--------------------|-----------------------|
| I 心理的安定に関連する基本的な喪失 | IV 鑑賞能力の喪失            |
| 1. 身体的な完全さの喪失      | 11. 楽しみを感じる力喪失        |
| 2. 残存感覚に対する自信の喪失   | 12. 美の鑑賞力の喪失          |
| 3. 環境との現実的な接触能力の喪失 | V 職業・経済的安定に関する喪失      |
| 4. 視覚的背景の喪失        | 13. レクリエーションの喪失       |
| 5. 光の喪失            | 14. 経験・就職の機会などの喪失     |
| II 基本的技術の喪失        | 15. 経済的安定の喪失          |
| 6. 移動能力の喪失         | VI 結果としての全人格に生じる喪失    |
| 7. 日常生活技術の喪失       | 16. 独立心の喪失            |
| III 意志伝達能力の喪失      | 17. 人並みの社会的存在であることの喪失 |
| 8. 文書による意志伝達能力の喪失  | 18. めだたない存在であることの喪失   |
| 9. 会話による意志伝達機能の喪失  | 19. 自己評価の喪失           |
| 10. 情報とその動きみ知る力の喪失 | 20. 全人格構造の喪失          |

Ⅲ群～Ⅵ群は、体験学習前後共に記述件数も少なく、全体に占める割合も低かった。

次に、視覚遮断状況下で必要とされる援助の項目では、体験学習前に必要であると考えられた知識レベルの援助は、延べ188件であった。また、体験学習後の実習場面で実際に実践できた援助は、延べ60件であった。実践では1/3に減少した。これらを J. Carroll の 6 群によって分類し<sup>1)</sup>、必要性を感じた知識レベルの援助項目と実際に実践できた援助項目について体験学習の前後で比較した。図 2 には、その結果を示している。

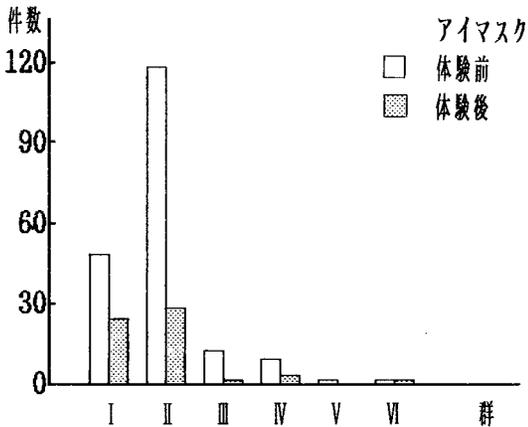


図2 知識レベルの援助(体験前)と実践できた援助(体験後)の比較

体験学習前に必要であると考えられた援助項目では、I群の心理的安定に関する基本的な喪失に対する援助48件、II群の基本的技術の喪失に対する援助118件であった。これらの群は、全体の件数に占める割合も著しく高かった。

体験学習後実際に実践できた援助項目では、I群の心理的安定に関する基本的な喪失に対する援助24件、II群の基本的技術の喪失に対する援助28件であった。体験学習前に比較し、記述件数は減少したが、I群・II群が、体験学習後に実践できた援助項目のほぼ全体を占めていた。

Ⅲ群～Ⅵ群は、体験学習前後共に記述件数は少なく、全体に占める割合もきわめて低かった。これは、図1の不安・不自由の理解でのⅢ群～Ⅵ群と同様の傾向を示している。

また、視覚遮断の体験学習の有効性についての質問に対して、視覚障害患者の不安・不自由の理解に有効であると答えた学生は85%、どちらともいえない12%、援助を実践する上で有効であると答えた学生は62%、どちらともいえない21%の回答が得られた。

#### 4. 考 察

視覚障害患者への理解と援助は、必要性においては、学生は体験学習の前後ともに、心理的安定や基本的な技術面の喪失に対して理解しやすいと考えられる。また、視覚障害者を実際に援助する上で、視覚遮断状況を体験学習することにより、患者の立場を考慮した具体的な援助が実践できると考えられる。

視覚遮断によって生じる不安・不自由の理解では、心理的安定に関連する基本的な喪失への理解に、体験学習の効果が最も認められている。また、記述された内容からも体験学習後には、直接学生が体験を通して実感したと思われる内容が挙げられ、患者の置かれている状況を感じ取ることができている。以上の2点からも患者の心理面の理解を深める上で、体験学習の効果があると考えられる。

意志伝達能力の喪失・鑑賞能力の喪失・職業・経済的安定に関する喪失・結果として全人格に生じる喪失については、臨床実習での患者の喪失の実態把握には則していないため、理解しにくく、援助も考えにくい項目と考えられる。鑑賞能力の喪失について、J. Carroll は美の鑑賞力の喪失は、他の喪失と異なり、失明者にとっては決定的に堪えられないものである<sup>1)</sup>と述べている。また、講義においてもこの点は、重要視している。そこで、限られた臨床実習では学び得ない項目について、学習方法を検討していく必要があると思われる。服部は視覚遮断の体験学習によって基本的技術の喪失・意志伝達能力の喪失に含まれる項目は、学生が学び得る項目である<sup>2)</sup>と述べている。しかし、臨床実習において、患者を対象とした場合は、基本的技術の喪失に対しては共通していたが、服部の言う意志伝達能力の喪失<sup>2)</sup>よりも

心理面の喪失に対する学習がより深められた。

体験学習後の援助行動では「介助者の立つ位置」「誘導の方法」「身体の接触面積」等が実践上の注意点として新たに挙げられ、体験を通して、より具体的な援助に結びついたと考えられる。

また、体験学習前に基本的技術の喪失の内容として挙げられていた公共機関の使用や日常生活動作の自立に関する理解が、体験後の内容には見られないことや、体験学習後実際に実践できた援助項目が全体的に減少したことは、体験項目の選定及び実習環境による影響が考えられる。しかし、実際には、学生の予想以上に、日常生活動作の自立した患者が多いことが、影響していると考えられる。

体験学習に対する感想では、「自立をさまたげない援助が必要である」「不自由を克服する努力がわかった」等が挙げられ、患者の自立を妨げない適切な援助の必要性が理解されたと考えられる。

## 5. 結 論

感覚器実習に視覚遮断の体験学習を導入することは、視覚障害患者の心理面の理解と援助に有効であり、患者の自立を妨げない援助の必要性の理解を助ける。また、援助の方法がより具体化され、

必要性を理解した援助行動に結びつけることができる。以上の3点が明らかとなった。

## 6. おわりに

今回の体験学習では、誘導による移動を実施した。学生は、指定した項目以外にも昼食時間を利用して食事の介助や、構外へ買物に出る等自発的に視覚遮断の体験範囲を広げ、体験学習に対する意欲的な取り組みが感じられた。今回の研究から今後も体験学習を導入することにより効果的な指導方法を検討していきたいと思う。

本稿の要旨は第2回日本看護学教育学会において発表した。

## 文 献

- 1) Thoms J. Carroll (樋口正純訳)：失明，日本盲人福祉委員会，東京，1977
- 2) 服部朝子：視覚遮断状況下での空間認知と時間認知アイマスクを用いたの体験学習から，日本看護研究学会雑誌，9(4)：78-88，1987
- 3) 山本規容子，津田紀子，松本比佐江：学内実習における体験学習の効果 鼻腔栄養チューブ挿入経験を通して，神戸大学医療技術短期大学部紀要，2：145-151，1986

(1992年10月21日受理)